或夜

永井荷風

青空文庫

季子は省線市川驛の待合所に入つて腰掛に腰をかけた。然し東京へも、どこへも、行かうといふ譯ではない。公園のベンチや路傍の石にでも腰をかけるのと同じやうに、唯ぼんやりと、しばらくの間腰をかけてゐやうといふのである。

改札口の高い壁の上に裝置してある時計には故障と書いた貼紙がしてあるので、時間はわからないが、出入の人の混雜も日の暮ほど烈しくはないので、夜もかれこれ八時前後にはなつたであらう。札賣る窓の前に行列をする人數も次第に少く、入口の側の賣店に並べられてあつた夕刊新聞ももう賣切れてしまつたらしく、おかみさんは殘りの品物をハタキではたきながら店を片付けてゐる。向側の腰掛には作業服をきた男が一人荷物を枕に前後を知らず仰向けになつて眠つてゐる。そこから折曲つた壁に添うて改札口に近い腰掛には制帽の學生らしい男が雜誌をよみ、買出しの荷を背負つたまゝ婆さんが二人煙草をのんでゐる外には、季子と並んでモンペをはいた色白の人妻と、膝の上に買物袋を載せた洋裝の娘が赤い鼻緒の下駄をぬいだりはいたりして、足をぶら〳〵させてゐるばかりである。

色の白い奥樣は改札口から人崩の溢れ出る度毎に、首を伸し浮腰になつて歩み過る人に氣をつけてゐる中、やがて折革包を手にした背廣に中折帽の男を見つけて、呼掛けながら馳出し、出口の外で追ひついたらしい。

季子は今夜初てこゝに來たのではない。この夏、姉の家の厄介になり初めてから折々憂欝になる時、ふらりと外に出て、蟇口に金さへあれば映畫館に入つたり、闇市をぶらついて立喰ひをしたり、そして省線の驛はこの市川ばかりでなく、一ツ先の元八幡驛の待合所にも入つて休むことがあつた。その度々、別に氣をつけて見るわけでもないが、この邊の町には新婚の人が多いせいでもあるのか、夕方から夜にかけて、勤先から歸つて來る夫を出迎へる奥樣。また女の歸つて來るのを待合す男の多いことにも心づいてゐた。季子はもう十七になつてゐるが、然し戀愛の經驗は一度もした事がないので、さほど羨しいとも厭らしいとも思つたことはない。唯腰をかけてゐる間、あたりには何一ツ見るものがない爲、遣場のない眼をさう云ふ人達の方へ向けるといふまでの事で、心の中では現在世話になつてゐる姉の家のことしか考へてゐない。姉の家にはゐたくない。どこか外に身を置くところはないものかと、さし當り目當のつかない事ばかり考へつゞけてゐるのである。

この前來た時には短いスカートからむき出しの兩足を隨分蚊に刺されたが、今はその蚊もゐなくなつた。二人づれで涼みに來たり、子供を遊ばせに來る女もゐたが今はそれも見えない。時候はいつか秋になり、その秋の夜も大分露けくなつた。と思ふと、ます〳〵現在の家にゐるのがいやで〳〵たまらない氣がして來る……。

季子は三人姉妹の中での季娘で、二人の姉がそれ〳〵〝結婚してしまつた後、母と二人埼玉縣の或町に疎開してゐたが、この春母が病死して、差當り行く處がないので、此町の銀行で課長をしてゐる人に片付いた一番年上の姉の許に引取られたのだ。姉には三つになる男の子がある。義兄は年の頃四十近く、職務のつかれよりも上役の機嫌と同僚の氣受を窺ふ氣づかれに精力を消耗してしまつたやうに見える有りふれた俸給生活者。姉も同じく、配給所の前に立並ぶ女達の中には少くとも五六人は似た顏立を見るやうな奥さんである。ヒステリツクでもなく、と云つて、さほど野呂間にも見えず華

美好きでも吝嗇でもない。掃除好きでもない代り、また決して無性でもない。洗濯も怠らず針仕事や編物も嫌ひではないと云ふやうな奥さんである。毎日きまつた時間に夫が歸つて來ると、新聞で見知つた世間の出來事、配給物のはなし、子供の健康――日々きまつた同じ話を繰返しながら、いつまでも晩飯の茶ぶ臺を離れず、ラヂオの落語に夫婦二人とも大聲で笑つたり、長唄や流行歌をいかにも感に堪へたやうに聞きすます。その中臺所で鼠のあれる音に氣がついて、茶ぶ臺を片づけるのが、其日の生活の終りである。

さういふ家庭であるから、季子はそれほど居づらく思ふわけの無い事は、自分ながら能く承知してゐるのだ。自分の方から進んで手傳ふ時の外、洗ひものも掃除も姉から言ひつけられたことはない。兄はまた初めから何に限らず小言がましく聞えるやうな忠告はした事がなく、郵便を出させにやる事も滅多にない。日曜日に子供も一緒に夫婦連立つて買物方々出歩かうと云ふ折など、「季ちやん。一緒に行くかね。」と誘ふこともあるが、是非にと云ふ程の樣子は見せず、さうかと云つて留守をたのむとも言はない。季子はおのづと家に居殘るやうになると、却て元氣づき、聲を張り上げて流行唄を歌ひながら、洗濯をしたり、臺所の物を片づけたりした後、戸棚をあけて食殘りの物を皿まで嘗めてしまつたり、配給の薩摩芋をふかして色氣なく貪り食ふ。又ぼんやり勝手口へ出て垣根の杭に寄りかゝりながら晴れた日の空や日かげを見詰めてゐる事もあつた。

季子はどうして姉の家にゐるのがいやなのか、自分ながらその心持がわからなかつたのであるが、日數のたつに從ひ、靜に考へて見ると、姉の家が居づらいのではなくて、それは別の事から起つて來る感情の爲である事に心づいて來た。自分はさし當りこゝより外に身を置く處がない事を意識するのが、情けなくていやなのである。自分にはこゝばかりでなく、外に行く處はいくらもあるが、好んで此の家に來てゐると云ふやうに若しも思ひなす事ができたなら、自分は決していやだとも居辛いとも、そんな妙な心持にはならなかつたであらう。然し實際は全くそれとは相違して、こゝより外に行きどころのない身である事は明瞭である。さう思ふと心細く悲しくなると同時に、何も彼も癪にさはつて腹が立つて來てたまらなくなるのである。

どんな職業でもかまはない。季子は女中でも子守でも、車掌や札切でもいゝから、どこにか雇はれたいと思つてゐるが、それは姉夫婦が許してくれさうにも思はれない。人に聞かれても外聞の惡くないやうな會社や役所の事務員には、疎開や何かの爲高等女學校は中途で止してしまつたまゝなので、採用される資格が無い……。

ふと思ひ返すと、市川の姉の家へ引取られて、わづか四五日にしかならない頃であつた。一番上の姉よりもずツといゝ處へ片付いてゐる二番目の姉が鎌倉の屋敷から何かの用事で尋ねて來た時、話のついでに此頃は復員でお嫁さんを捜してゐるものが多いから、季子も十七なら、いつそ今の中結婚させてしまつた方がいゝかも知れないと言つてゐたのを、蔭でちらりと聞いたことがあつた。

その當座、季子は落ちつかないわく〳〵した心持で、茶ぶ臺に坐るたび〳〵姉や兄の樣子ばかり氣にしてゐたが、その話は今だに二人の口からは言出されない。季子は自分の方から切出して見やうかと思つたこともあるが、氣まりが惡いまゝ、それもいつか、それなりに、季子は日のたつと共に自分の方でも忘れるともなく忘れてしまつた。

見　すと、あたりはいつ間にか大分靜になつてゐる。荷物を枕にぐう〳〵眠つてゐた職工もどこへか行つてしまひ、下駄をはいたりぬいだり足をぶら〳〵させてゐた娘の立去つた跡には、子供をおぶつた女が腰をかけて居眠りをしてゐる。

その時季子は烟草の匂につれて其烟が横顏に流れかゝるのに心づき、何心なく見返ると、

「京成電車の驛は遠いんでせうか。」ときくものがある。

いつの間にか自分の隣りに、背廣に鳥打帽を冠つた年は二十四五、子供らしい面立の殘つてゐる一人の男が腰をかけてゐた。然し季子は自分に話しかけたのではないと思つて、默つてゐると、

「京成の市川驛へはどつちへ行つたらいゝんでせう。」

季子はスマートな樣子に似ず妙な事をきく人だと思ひながら、

「京成電車にはそんな驛はありません。」

「さうですか。市川驛は省線ばかりなんですか。」

「えゝ。」と云つて息を引く拍子に、季子は烟草の烟を吸込んでむせやうとした。

「失禮。失禮。」と男は手を擧げて烟を拂ひながら立上り、出口から見える闇市の灯を眺めてゐたが、そのまゝ振返りもせずに出て行つた。

列車の響と共に汽笛の聲がして、上りと下りの電車が前後して着いたらしく、改札口は駈け込む人と、押合ひながら出て來る人とで俄に混雜し初めたが、それも嵐の過ぎ去るやうに忽ちもとの靜けさに立返る。

季子は聲まで出して思ふさま大きな欠伸をしつゞけたが、こんな處にはもう我慢してもゐられないとでも云ふやうに、腰掛を立ち、來た時のやうにぶらり〳〵夜店の灯の見える方へと歩き初めた。

夜店の女達は立止つたり通り過ぎたりする人を呼びかけて、

「甘い羊羹ですよ。甘いんですよ。」

「あん麺麭はいかゞです。」

「もうおしまひだ。安くまけますよ。」

道の曲角まで來ると先程驛の事をきいた鳥打帽の青年が電信柱のところに立つてゐて、季子の姿を見とめ、

「もうお歸りですか。」

季子は知らない振もしてゐられず、ちよつと笑顏を見せて、そのまゝ歩き過ると、男も少し離れて同じ方向へと歩き初める。

江戸川堤から八幡中山を經て遠く船橋邊までつゞく國道である。立並ぶ商店と映畫館の燈火に明く照らされた道の兩側には、ところどころ小屋掛をしたおでん屋汁粉屋燒鳥屋などが出てゐて、夜風に暖簾を飜してゐる。

「お汁粉一杯飮んで行きませうよ。」

男はつと立止つて、さアと言はぬばかり、季子の顏を見詰めながら、一人先へ入つたが、腰掛にはつかず立つたまゝ、季子の入るのを待つてゐる樣子に、そのまゝ行つてもしまはれず、季子はもぢ〳〵しながらその傍に腰をかけた。

一杯目の汁粉を飮み終らぬ中、「もう一杯いゝでせう。割合に甘い。」と男は二杯目を註文した。

季子は初めから何とも言はず、わざと子供らしく、勸められるがまゝ、二杯目の茶碗を取上げたが、其時には大分氣も落ちついて來て、まともに男の顏や樣子をも見られるやうになつた。それと共に、

かうした場合の男の心持、と云ふよりは男の目的の何であるかも、今は容易く推察することが出來るやうな氣がして來た。二人はもとより知らない人同士である。これなり別れてしまへば、互に家もわからず名前も知られる氣づかひがない。何をしても、何をされても、後になつて困るやうな事の起らう筈がない間柄である。さう思ふと年頃の娘の異性に對する好奇心のみならず、季子は監督者なる姉夫婦に對して、其人達の知らない中に、そつと自分勝手に大膽な冒險を敢てすると云ふ、一種痛快な氣味のいゝ心持の伴ひ起るのを知つた。

　汁粉屋を出てから、また默つて歩いて行くと、商店の燈火は次第に少く、兩側には茅葺の屋根やら生垣やらが續き初め、道の行手のみならず、人家の間からも茂つた松の木立の空に聳えるのが、星の光と共に物淋しく見えはじめる。走り過るトラツクの灯に、眞直な國道の行手までが遙に照し出されるたび〳〵、荷車や人の往來も一歩々々途絶え勝ちになることが能く見定められる。

　鳥打帽の男は默つてついて來る。季子は汁粉屋にゐた時の大膽不敵な覺悟に似ず、俄に歩調を早め、やがて道端のポストを目當に、逃るやうにとある小徑へ曲らうとした。男はぐつと身近に寄り添つて來て、

「お宅はこの横町……。」

「えゝ。」と季子は答へた。然し季子の家は横町を行盡して、京成電車の踏切を越し、それからまだ大分歩かなければならないのだ。

　小徑の兩側には生垣や竹垣がつゞいてゐて、國道よりも一層さびしく人は一人も通らないが、門柱の電燈や、窓から漏れる人家の灯影で眞の闇にはなつてゐない。季子の呼吸は歩調と共に大分せはしくなつてゐる。男はどこまで自分の後をつけて來るのだらう。線路を越した向の松原——時々この邊では一番物騒な噂のある松原まで行くのを待つてゐるのではなからうか。いつそ今の中、手出しをしてくれゝばいゝのにと云ふやうな氣がして來ないでもない。

　季子が男の暴力を想像して、恐怖を交へた好奇の思に驅られ初めたのは、母と共に熊ヶ谷に疎開してゐた頃からのことで、戰後物騒な世間の噂を聞くたび〳〵、まさかの場合を、或時はいろいろに空想して見ることもあつた。この空想は鎌倉の姉が來て結婚のはなしを匂はせてからいよ〳〵烈しくなり、深夜奥の間で姉夫婦がひそ〳〵はなしをしてゐるのにふと目を覺す時など、翌朝まで寢付かれぬ程其身を苦しめる事があつた。

　突然季子は垣際に立つてゐる松の木の根につまづき、よろける其身を覺えず男に投掛けた。男は兩手に女の身を支へながら、別に抱締るでもなく、女が身體の中心を取返すのを待ち、

「どうかしました。」

「いゝえ。大丈夫よ。あなたも此邊なの。」

「僕。八幡の、會社の寮にゐるんです。今夜驛でランデブーするつもりだつたんです。失敗しました。」

「あら。さう。」

「あなたも誰かとお約束があつたんでせう。さうぢやありませんか。」

　生垣が盡きて片側は廣い畠になつてゐるらしく、遙か向うの松林の間から此方へ走つて來る電車の灯が見えた。

　季子はあたりのこの淋しさと暗さとに乘じて、男が手を下し初めるのはきつと此邊にちがひはない。いよ〳〵日頃の妄想の實現され

る時が來たのだと思ふと、忽身體中が顫出し、歩けばまた轉びさうな氣がして、一足も先へは踏み出されなくなつた。畠の縁に茂つた草が柔く擽るやうに足の指にさはる。季子は突然そこへ蹲踞んでしまつた。

季子は男の腕が矢庭に自分の身體を突倒すものとばかり思込んで、蹲踞むと共に眼をつぶつて兩手に顔をかくした。

電車は松林の外を通り過ぎてしまつた。けれども自分の身體には何も觸るものがない。手を放し顔をあげて見ると、男は初め自分が草の上に蹲踞んだのに心づかず、二三歩行き過ぎてから氣がついたらしく、少し離れた處に立つてゐて、

「田舍道はいゝですね。僕も失禮。」と笑を含む聲と共に、草の中に水を流す音をさせ始めた。男は季子の蹲踞んだのは同じやうな用をたすためだと思つたらしい。

季子は立上るや否や、失望と恥しさと、腹立しさとに、覺えず、「左樣なら。」と鋭く言捨て、もと來た小徑の方へと走り去つた。

やがて未練らしく立留つて見たが、男の追掛けて來る樣子はない。先程蹲いた松の木の梢に梟か何かの鳴く聲がしてゐる。

季子はしよんぼりと一人家へかへつた。

（昭和廿一年十月草）

青空文庫情報

底本：「葛飾こよみ」毎日新聞社
　　1956（昭和31）年8月25日初版発行
初出：「勲章」扶桑書房
　　1947（昭和22）年5月10日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：H．ＹＡＭ
校正：米田
2010年9月5日作成
2016年2月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或夜

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/